

尊、其三曰弘計王、更名來目稚子、其四曰飯豐女王、亦名忍海部女王、其五曰橋王、一本以飯豐女王列、叙於德計王之上、蟻臣者、葦田宿禰子也、

〔晉書列傳〕杜預、字元凱、中略既立功之後、從容無事、乃耽思經籍、爲春秋左氏經傳集解、又參攷衆家

譜、謂之釋例、

氏文

〔藻鹽草〕十七人事雜物文

もの、ふのやそうち文、これいかによ

〔倭訓栞〕中編三うちぶみ 氏文の義、今いふ系圖也、

〔夫木和歌抄〕三十二文

六帖題

武士のやそうちぶみはかたへに行わかれたるあとぞみえける

正三位知家卿

〔古史徵〕一夏釋紀または年中行事秘抄などに引たる高橋氏文と云物あり、岩鹿六鴈命の裔の

高橋氏の事を記せる文なるが、甚珍しき事實ども見え、餘の書にも氏文てふ事の見えたるを

思ふに古はかゝる文の多かりしと聞ゆ、藻潮草てふ歌書に、人事部といふ部に、氏文と記して、

て可尋さばかり見えたり、氏文てふ物を知らざりしと聞えて、これはいかによや云々と云へ

ども此は扶木抄に、物部の八十氏文はかたへに行別れたる跡ぞ見ける、さあり、此歌に依

し、古く氏文てふ物の多かり信友が説に、神宮雜例集嘉應二年左辨官下伊勢大神宮司書に神

部等氏文ともあり、氏文といふ稱、なほ彼此ものに見え、また源平盛衰記に、西七郎廣助とべの

三郎家俊と戦はむとする時に、廣助遠祖の名を顯はし、祖の功を稱へ上て名告せるに、家俊が

對て、わぎみは軍のあれかし、氏文よまむと思ひけるかどて、又同じさまに言舉して名告し趣

を記せり、註かくて高橋氏文の遺文、また盛衰記なる諍言を按ひ合すに、遠祖より繼々の氏

人の名を連ね書せるは素よりにて、代々の祖の事蹟をも委曲に書せる物と通えたり、本系帳

と云も同じ物ながら、族の次第を系け圖きたる方を主とし、氏文とは氏の出自の由緒を始めて、代々の事蹟を書けるを主とせるなるべく所思ゆ、